

文字を目で追えれば、自然と音読ができる

同じ絵本を何度となく読み聞かせてあげていると、そのうちに子どもはお話をすっかり覚えてしまい、お母さんが読み間違えたり、勝手に端折ったりしようものなら、「そこはそうじゃないよ」などと指摘したりします。しかし、これは言うなれば丸暗記で、本が読める」という状態とは明らかに異なります。

では、どうしたら丸暗記から徐々に「本が読める」状態へと移行していただけるのでしょうか。第一のステップとして、キーワードとなる漢字をカードにすることを挙げました。それらの漢字がしっかり順に入っていると、子どもは絵本の中にとりどころ自分で読める字を見つけることができます。そこで第二のステップでは、その知っている漢字を頼りに、お母さんが読んでいる絵本のページをお子さんにめくってもらおうのです。

そして、正しくページをめくれるようになったら、今度はお母さんが読むのに合わせて、文字を一字一字指でなぞっていきます。すると、最初は知っている漢字を追っていくのが精一杯でも、何度もくり返しているうちに次第にその途中にある言葉にも目が行くようになってきます。また、途中で読んでいる箇所を見失っても、文章の冒頭に知っている漢字があれば、それを手がかりにふたたび行の最初から指で追っていくことができます。文章の冒頭の漢字をキーワードに加えておくのは、そのためなのです。

一字一字が正しく指せるようになれば、お子さんはもう十分「本を読める状態」と言ってもいいでしょう。

ただ、そこまでもっていくには、何度も何度も反復することが必要です。決して焦らないことです。お子さんが正しくページをめくれなかったり、なぞる文字を見失っても決して責めずに、「じゃあ、次はここから読もうね」とやさしくフォローしてあげてください。うまくできたときは、「よくできたね」「すごいね」と、精一杯誉めてあげましょう。

ただし、一字一字正しく指せるようになったからといって、急に読み聞かせをやめてしまったり、音読を強要するのはよくありません。「読書は楽しいもの」と感じるのがいちばん大切ですから、「自分もお母さんの真似をして読んでみたい」という気持ちがお子さんに自然に芽生えるまで、読み聞かせをしてあげればよいのです。

そして、もしお子さんが「ねえ、聞いて」と言ってきたら、そのときは、どんなに忙しくても、熱心に耳を傾けてあげてください。すらすら読めるようになるまでには、さらに何度となくくり返すことが必要ですが、ひとりで本が読めるようになったという達成感、お子さんにとって大きな自信にもつながります。